

昭和54年度研究報告

日赤医療センター小児科 川 崎 富 作

われわれは(1)冠動脈造影所見からみた川崎病治療法の検討と(2)いわゆる上野、松見説に対する病因論的検討の2点につき検討した。

1. 冠動脈造影所見からみた川崎病治療法の検討: 別紙の如く、われわれの成績によれば、冠動脈瘤を指標とした冠動脈病変と治療法との関係を見ると、その病変の出現頻度は治療法とは相関せず、むしろ、浅井、草川のスコアとよく相関した。

2. いわゆる上野、松見説につき、予研の永瀬氏、神奈川衛研の宮本氏と共同で追試を試みた。結果は別紙の如く、いずれも、上野、松見説を肯定する成績は得られなかった。つまり、上野、松見氏らのいう、溶連菌病因説を裏付ける証拠はなにも得られなかったのであるが、これで溶連菌起因をすべて否定できたというものではない点を附加する。

川崎病のいわゆる「上野・松見説」に対する追試成績

日赤医療センター小児科 川 崎 富 作

柳 瀬 義 男

国立予防衛生研究所細菌第一部 永 瀬 金 一 郎

1979年7月の第297回小児科学会東京都地方会において、上野、松見はMCLS患者血中に新しい技法を用いて溶連菌を証明し、これによりMCLSの発症が溶連菌によるとする病因説が確定したと報告した。今回我々は彼らの仮説を追試し、その正否について検討した。

材料と方法

材料は1979年7月より1980年1月までの間に日赤医療センター小児科に入院した患児のうち、診断基準を満足する typical な MCLS 患児と、control として溶連菌感染症を除いた急性感染症患児を中心として各々13例を選んだ。方法は「上野・松見」の方法¹⁾に従った。すなわち EDTA 処理にて得た plasma と、A 群溶連菌免疫兔血清とを CRP 検査と同様な手法で、毛細管中にてほぼ等量ずつ重層させ、37°C で反応させた。また形成された微細反応物の一部を光顕的に観察した。

結 果

MCLS 患児と同様に control 児にも微細反応物が認められ、また使用する抗血清により反応物の形成が一定

でなかった。形成された反応物の一部を光顕的に観察したが、彼らのいうところの溶連菌菌体らしきものは発見できなかった。

考 察

今回我々の検討した内容は「上野・松見説」に対するものであり、溶連菌と MCLS のかかわりにつき言及し得るものではない。

「上野・松見説」の内容は、① MCLS は A 群溶連菌によるものであり、② 抗生物質の投与により、一斉に患者生体において菌が破壊され、そのために発症し、③ その菌体は彼らの開発した方法により血中に検出され、④ 崩壊ないし膨化した菌体として、光顕および電顕的に証明し得る。とする仮説である。

しかしこの仮説においては、MCLS は抗生物質の投与がなくても発症する点にまず問題があると思われる。さらにまた、彼らの論文をみる限りにおいては、MCLS 患児の plasma を用いたときの微細反応物中に溶連菌菌体を証明したとしているが、我々の成績では MCLS 患

児 plasma と同様に, control 児の plasma の反応においても同様の形成物を認めている。

しかるに, 彼らの論文中には control 児の plasma を用いたときの微細反応物中に溶連菌菌体が存在しないこ

との証明が明記されておらず, この点を今後は明らかにされるべきと考えられた。

1) 上野忠彦・松見富士夫:小児科臨床, 31: 747, 1978。

MCLS 患者における血液培養成績の検討

日赤医療センター小児科 川 崎 富 作
柳 瀬 義 男
神奈川衛研細菌病理部 宮 本 泰

目 的

上野, 松見ら¹⁾は MCLS 患者血中より溶連菌菌体の存在を証明したと報告したが, 今回我々は, L型菌も含めて MCLS 患者の血液培養を試み, 彼らの仮説について検討した。

材料と方法

対象には1979年7月より12月までに発症した typical な MCLS 16例を選んだ。入院施設の内訳は, 横須賀市聖ヨゼフ病院6例, 共済立川病院1例及び日赤医療センター9例である。使用培地は, 溶連菌の親株検出用として Columbia 培地 (BBL), L form 検出用として Modified Edward 培地及び Modified Adler 培地を使用した。患者16例中14例は10病日以前の有熱期に採血し, 培地に接種した。

結 果

皮膚の消毒にエタノールあるいはクロルヘキシジン, エタノール使用例では連鎖球菌3 (Str. viridans—1, Str. sanguis II—1, Str. mitis—1) 及び未同定菌1が検出されたがこれは不十分な皮膚消毒の可能性が考えられた。消毒をヨードチンキに変えてからは, 連鎖球菌の検出はみられず, peptococcus 1例, petococcus とグラム陰性桿菌の同時検出1例のみであった。またL型菌は検出されなかった。

考 察

以上検出された菌7株は, 皮膚よりの contamination の可能性が考えられA群溶連菌は検出されなかった。

1) 上野忠彦, 松見富士夫:小児科臨床, 32: 2119, 1979。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1979年7月の第297回小児科学会東京都地方会において、上野、松見はMCLS患者血中に新しい技法を用いて溶連菌を証明し、これによりMCLSの発症が溶連菌によるとする病因説が確定したと報告した。今回我々は彼らの仮説を追試し、その正否について検討した。